

# 徳川日本における人口抑制行動とその比較アジア史的考察

著者	速水 融
雑誌名	日本研究・京都会議 KYOTO CONFERENCE ON JAPANESE STUDIES 1994 ?
巻	.non01-01
ページ	381-382
発行年	1996-03-25
その他のタイトル	Abortion, Infanticide and Neglect in the Asian Past
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00003483">http://doi.org/10.15055/00003483</a>

# 徳川日本における人口抑制行動とその比較アジア史的考察

速 水 融 (国際日本文化研究センター)

HAYAMI Akira

「徳川日本における人口抑制行動とその比較アジア史的考察」を標題に掲げ2日間にわたって開かれた5セッションは、国際人口学会との共催で行われたものである (IUSSP/IRCJS Workshop on Abortion, Infanticide and Neglect in the Asian Past: Japan in Asian Comparative Perspective)。「堕胎・嬰兒殺し・放置」を共通テーマに、中国、台湾、韓国、インド、アメリカ、イギリス、日本からの参加者が、16本の論文を報告し、最後に総括討論を行った。成果は、James Lee and Osamu Saito eds., *Abortion, Infanticide and Reproductive Behavior in Asia: Past and Present* (仮題) として公刊予定である。ここでは各セッションの概要を紹介するので、各論文の詳細についてはそちらを参照していただきたい。

## Session 1 Concepts: old ideas and new perspectives

まず Tamara Hareven から、問題の所在についての概括的な報告があった。徳川日本における堕胎・間引き研究史の変遷に触れた後、家族戦略としてこの問題を捉える視覚を示唆した。またヨーロッパではこれらに替わる手段は捨て子 (abandonment) であったと指摘した。続いて、太田素子・沢山美香子は日本、Hsiung Ping-chen と Francesca Bray は中国における妊娠、堕胎、嬰兒殺し、身体を理解について、それぞれ歴史学、民族学、医学史の立場から報告した。討論者の斎藤修は、Bray の言葉を用いれば reproductive cultures に関するこれらの研究と歴史人口学との連携との必要を強調し、またこれらの報告が嬰兒殺しよりも堕胎の果たした役割の大きさを指摘したことから、堕胎にもっと注目するべきであると述べた。

## Session 2 Abortion, infanticide and neglect, and the gender patterns of mortality

このセッションでは、堕胎・嬰兒殺し、放置などの結果の、性比のアンバランスがテーマとされた。まず速水融が Thomas Smith が Nakahara で示した仮説 (日本では子どもの性比を適切なものにするため嬰兒殺しが行われていた) にはデータの吟味の点で問題があったことを示した。Mahendra Premi と Arup Maharatna はインドにおける性比について報告し、出生性比の偏りから女子のみの嬰兒殺しがあった可能性があること、飢饉時には性別により選択的に食物を与えないことがあったことなどを指摘した。James Lee と Cameron Campbell は遼寧省の農民のデータから女子の死亡率は乳児期を過ぎてもなお男子より高かったこと、しかしその格差は日数がたつにつれて縮小することから、短期的には嬰兒殺し、長期的には放置という異なる手段が用いられたであろうことを示唆した。また、Lee らから、中国では20世紀初めまでに嬰兒殺しが消え、堕胎が増えたのはなぜかという問題提起があった。

### Session 3 Abortion, infanticide, neglect and fertility control

Laurel Cornell は「日本では徳川時代から低出生率・低死亡率で出生転換は無かった」という仮説がなぜ信じられることになったのかを研究史を振り返りながら解説して批判した。友部謙一は徳川時代日本の各地のデータを分析し、中央日本では高出生率・stopping 型の出生抑制無し、東北日本では低出生率・stopping 型の出生抑制有りという地域差を示した。友部はまた徳川日本における低出生率の原因は不妊にあるのではないかと示唆すると同時に、spacing 型の出生抑制の重要性に注意を喚起した。Irudaya Rajan はインドでは堕胎や嬰兒殺しより放置が重要な手段であったと述べ、また母方居住地域では男子を殺す習慣があった可能性を指摘した。Wang Feng・James Lee・Cameron Campbell は東アジアには共通して低出生率という特徴が見られたことを示し、手段としては spacing が重要であったと主張した。

### Session 4 Abortion, infanticide, neglect in the modern world

村松稔は戦後日本、Wang Feng と William Mason は現代中国、Minja Choe は現代韓国における人工妊娠中絶について報告した。Wang によれば中国では人工妊娠中絶による性別選択が行われているが、Mason は息子選好には社会経済的背景は影響を与えていないとする。息子選好は韓国でも見られる。討論では落合恵美子が避妊と中絶を同時に考察することが必要であると提起し、中国、韓国、日本のいずれにおいても避妊が普及しているにも関わらず中絶もまた多く行われているのはなぜか、性別を選好するためか、日本では息子選好はもはや存在しないので文化的共通性を考えるべきではないかなどとの議論がなされた。

### Session 5 Round-table discussion

近代・前近代、抑制出生力・自然出生力といった二分法はもはや受け入れられないことが大前提として確認された上で、東アジアの共通の伝統とは何か、ヨーロッパでは stopping が重要であったがアジアでは spacing の役割が大きかったのではないかといった議論がなされた。